

身体的コミュニケーションとしての模倣に関する論考

鈴木 裕 子

1. 問題の所在と研究の目的

1. 今、なぜ模倣なのか

幼児期の模倣、特に「子どもが他者の動きをまねる」ことへの関心は、筆者がこれまでに保育者と協働的に取り組んできた「自由からだで表現することを支援する活動」や「身体活動性を高めるための介入」の場から生まれている。次世代に生きる子どもたちのいきいきとしたからだや感動するところを育てたいと願い、「こころとからだの相互作用」に焦点を当て、以来一貫して行ってきた幼児の身体表現と身体活動の場をフィールドとした実践や観察を中心とした研究から発想されたものである。

身体活動の場では、「幼児の身体活動量の増加と活動意欲の形成に関する研究」を行った。身体活動量や運動能力の調査から問題点を把握した後、プレイ、リーダー、チャレンジ、ソーシャルの4因子で構成される「子どもアクティビティ尺度」を開発した¹⁾。本尺度作成の作業からは、からだところ両面の支援の重要性が具体的に確認され、他者とのかわりがからだところの相互作用を活性化させる要素となることが明らかにされた。特にソーシャル因子には、「周囲の子をよく見ていて真似して遊ぶ」の項目に見られるように、身体を通じた他者との出会いによって“他者とかかわりながら共に生きる”という共同的で流動的な自己の形成を拓く可能性が示唆されたのである。

身体表現の場では、と「からだところ」の動きの一端を「動きとイメージ」と捉え、その相互作用を実証的に検討する試みを続けてきた。具体的には、幼児が身の回りのさまざまな事象をからだや動きを使って表現する活動の特徴を捉え、援助の視点を検討した。さらに、子どもたちが「からだを使って物語る」場面を分析し、子どもの世界観を紐解いてきた。これらの研究では、生き生きとした表現とは、個人内の動きとイメージの交

流によって生まれるというパラダイムを基軸にしたわけであるが、“お互いに影響しあう関係性”という別の軸から見つめ直したところ、他者と身体でかかわることによって生み出される表現の豊かさに目を奪われたのである。同時に、その豊かさの多くの部分を「模倣（まねる）」という行為が占めていることが見えてきたのである。そこから、模倣をからだところを存分に使って自己を発揮し、他者とやりとりする行為として、積極的に捉え直してみたいと考えた次第である。

これまでに事例の質的検討を通して、「模倣」という行為が、何らかの情報を得てそれを変化させたり生まれ変わらせたりして独自の表現を生成させる力となっていることを捉えてきた。そこでは発現する模倣のパターンの分類を試み、その意味と機能の検討を進めた。模倣には「他者とのほどよい一致点を見出す」機能があり、他者とのかわりを築く豊かな力がある点が示唆された。それは、身体という媒体の持つ典型性の高い機能であり、身体的表現、そのなかでも特に「身体的コミュニケーション力」の端緒と思われた。

一方、近年我が国における最重要課題は「教育の改革」である。その背景には学力低下だけでなく、いじめ、不登校、きれる、ひきこもりといった「社会で生きる力」に関わる問題が存在する。

幼児期には他者とかかわることの基盤がつけられる。模倣という行為によって子ども一人ひとりが自らの身体を通して他者の存在を受け入れる。自己を確認し自己を高めていくというプロセスを経験する。共に生きるという感覚を体得する。これらのことが、コミュニケーション力を育み、「社会で生きる力」を培うことになり、先の問題の解決への一助となると考える。この時期の身体的表現としての模倣の意味や機能を明らかにし、身体を通じたコミュニケーションが円滑に行えるような環境や支援を論じることに踏み出したいと考えるのは、このような時代の背景にも動機づけられ

ている。

以上のことから、「身体的コミュニケーション」を育むことが「他者とかかわる力」の獲得にどのような影響を与えるのかを視点として、幼児期における模倣という行為の意味や機能をアプローチしてみたいという本研究への動機に至った。

その一環として、本稿では、問題意識の背景としての模倣に関わる思索を整理することで、模倣を研究する意義を確かにし、新たな探索の足場を固めたいと考えている。

本研究での議論や知見が、現代の保育・教育現場の課題解決に資するものとなり、子どもたち一人ひとりの未来への可能性を拓く一助となり、再びその現場に還元されることに大きな願いを持って進めようと思う。

2. 本研究における「模倣」

本研究で対象とする「模倣」は、行為概念としての「人が人を」模倣する状況を示す。両義的に存在するのは、「物が物を」「写す」、あるいは「倣う」という模倣関係である。この二つを区別するために、美学者らは、前者をラテン語の *imitatio*、後者をギリシャ語の *mimesis* と表す場合も見られる²⁾。

3. 研究目的

本稿の第一の目的は、乳幼児期において身体が為す“まねる”という事象を中核に据え、模倣に関する既存の理論を、哲学、人類学、心理学などの領域、あるいはその他の社会生活の文脈から概観し、乳幼児をはじめとして、日常生活における模倣の発現の意味を確認することである。身体に強く焦点を当てた場での模倣の意味や機能についての理論を整理したい。

第二の目的は、今後、身体的コミュニケーション力を育むための模倣の有効性について実証的に検討を進める前に、第一の論考と合わせて「身体的コミュニケーション」に関する諸理論を整理することである。

第三の目的は、上記二点の論述を合わせて、模倣が、身体的なコミュニケーション力を育むことに結びついていく可能性を論考することである。

以上のような模倣の諸相の論考により、研究の

全体像からみた今後の課題をも随時整理してみた。

II. 模倣についての哲学的な思索

1. 模倣につながる思索：身体の同調

哲学的な思索のなかで模倣が扱われる多くは、他者との関係において「身体」や「身体性」の果たす役割は何かといった問いかけを、具体的な現象として解明していこうという試みの中に見られる。

市川³⁾⁴⁾は、「身(み)」という観念を鍵にして、心身二元論を越えて、社会のなかで生きられる身体を描こうとしている。身は関係の存在であり、その関係において身のあり方が生起するとしている。他者に対して自分、社会的状況に対して自分のあり方というように関係の多様に応じた多重性を持つとしたのである。そのうえで、他者理解の基本を、他者の身のはたらきとの間に起こる感応的な同一化としての「同調」にあるとし、感応の起こり方の形式から同期的同調と、応答的もしくは役割的同調に分けられるという考えを進めている。前者は文字通り同じ型になることであり、後者は相手の所作に応答し、対応する所作などをとることとし、いずれの同調にも顕在的なものと潜在的なものがあることを相対化して捉えている。

本論で扱おうとしている身体的表現としての模倣は、無意識的か意識的かの論議を先に送れば、顕在的同調、実際に動作を行なっている場合を対象としているが、一方で市川の説く潜在的な同調の類型化、つまり身体図式と同調、イメージレベルの同調、観念的レベルの同調から言語化へという相に収束された解釈は、模倣発現のプロセスを明らかにするにあたって多くの示唆が得られる。また、同調はいわゆる「人の身になる」ことで、他者との共感を築く前段階としての必須な経験として意義づけている点は、身体的コミュニケーション力を育むための模倣が果たす役割の論拠となるだろう。

一方、鷺田⁵⁾⁶⁾は、現代社会における身体を「パニク・ボディ」と名づけ、市川の「身(み)」の思索を手がかりにしつつ、身体という視座から社会の諸問題を解き明かそうとしている。問題の根底には、身体のもつ社会性の消失が潜んでいると

警鐘を鳴らしている。身体とはそもそも社会的なものであり、換言すれば自分の身体のかかわりでさえも、他者というものを經由して理解しており、他者の身体との相互浸透があるからこそさまざまな共振の現象が生まれると述べている。

そのなかで、幼児期に、一人対一人、一人対他にかかわらず、無意識にしぐさをまねしたり、お歌やお遊戯などを通して、皆で一緒に身体を使い、動かし、他の人の身体に起こっていることを生き生きと感じる練習をしてきたことの意義に触れている。このような活動こそが、身体に想像性や判断力を備えさせ、他人を思いやる共存の気持ちを育んでいると述べ、続けてこのような教育が、幼児期にしか行なわれていないことを危惧し、就学以降での必要性を提唱していることは興味深い。

2. 模倣と身体的コミュニケーションの関係への思索

尼ヶ崎⁷⁾⁸⁾は、コミュニケーションの成立とは、「相手の言葉を理解する」といった命題の所有よりも「相手を理解する」ことであり、このような他者理解の内実は身体性に委ねられると述べている。相互理解が実現するためには、言葉のやりとりの底で、身体の「なぞり」が行なわれているという論を、竹内⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾の演劇を通した実践的な身体研究や、メルロ＝ポンテ (Maurice Merleau-Ponty)¹²⁾のパロール論、対話の場においては、対話者同士が主客未分の融合状態であり、二つの主観からふたつの言葉が交互に発せられるのではなく、相互主観性から一つの言葉が交互に展開していくという論述から明らかにしようとしている。

また、模倣は自身の身体を客体として操作し非文脈的な動きの集まりである「形」を似せることであり、「なぞり」は、身体の自発的な活動の「型」を自分の身体に具現化させることであるという図式を、生田¹³⁾の日本の伝統芸能におけるわざの習得から導きだされた論に依拠して述べている。「型」を学ぶとは、外から見た「形」だけでなく、それに伴う「心」を学ぶことであるとし、例えば子どもが大人の行為をまねすることによって、無意識に世界感や身体性を共有させ、心情までも同

一化させている状況はこの論考を象徴的に表すものである。「真似る」は「学ぶ」と同じ語源であるという事実は、模倣が学習の基本であることを端的に示していると言える。

しかしながら、幼児間の時々刻々と移り変わる他者とのやりとりや二度と同じ状況が生まれない生活の文脈から相互の模倣を見つめていると、「模倣は同じものを作ろうとする操作活動で、なぞりは自ら同じ物になろうとする反復活動」と切り分けをするよりも、二つは相互に循環しながら進行しているように感じられる。それは、文脈のなかで継起的に生み出される模倣の様相を分析することによってこそ、模倣のもたらす豊かさが拓けてくると思われるからである。そこからは、観察を中心とした質的な研究の妥当性や子どもの行為を見る視点が確認されるのである。

菅原¹⁴⁾は、身体のコミュニケーションを思索する前提として、「非言語的行動 (ノンバーバルコミュニケーション)」「身ぶりの定義」「対面相互行為」に関する研究史の瞥見を行ない、コミュニケーションの定義を構想しようとしている。

非言語的行動 (ノンバーバルコミュニケーション)の仕方は何によって規定されるのかという論議は、チャールズ・ダーウィン (Darwin,D.)の生物学的決定論まで遡り、その後の対峙する見解としてディビット・エフロン (Efron,D.)、レイ・バードウィステル (Birdwistell,R.)による文化決定論に続く。次いで、心理学に近接し非言語行動を起源、機能、記号化の特性に基づいて周到かつ包括的に分類したポール・エクマン (Ekman,P.)らの折衷論、イレネウス アイブル＝アイベスフェルト (Irenäus Eibl-Eibesfeldt)の示した遺伝的決定論までを素描したうえで、アーヴィング・ゴフマン (Goffman,E)に代表される相互行為の社会学に、身体性が果たす役割の解明の糸口が存在することを浮き出させている。

「身ぶりの定義」は、前述したポール・エクマンとフリーゼン (Friesen,W.V)¹⁵⁾による身体動作の5分類を中心に、多くの研究者によって行なわれた身体動作の分類やその基準を紹介しながら論述している。ポール・エクマンとフリーゼンによる5分類とは、「標識、表象 (emblems)：共同体のなかで定まった意味をもち、ことばのかわりに使

用される」「例指示、例示 (illustrators) : 発話に随伴し意味を補強して拍子をとる」「適応子、適応行為 (adaptors) : 身体の状態を調節したり、周囲の環境に適応したりする働きをもつ」「調整子、調節 (regulators) : 出合いを方向づけたり会話の流れの速さを調整する」「情緒表示、感情表示 (affect displays) : 感情表出」である。身ぶりをコミュニケーションとの関わりの中なかで、こころの現れとして捉えようとする類別には、本研究における模倣の持つ「他者と身体に関わる力」の思索に示唆を与えてくれるものがある。

また、対面相互行為 (フェース＝トゥ＝フェース・インタラクション) の構造を明らかにするために多くの学者が一貫して関心を向けていたのが「同期」「同調」「リズム」という現象であるという事実は、人と人との身体的なまじわりを紐解くには、実験による仮説の検証の積み重ねにこそ客観性があるという研究動向や身体が為す行為が言語の周辺に位置するという記号論的思索様式に対峙する姿勢を表し、文脈分析による研究方法の意義を語っている点で共感を覚えるのである。ひいては記号として意味する身体を語る以前に、他者と外界に向かって開かれ、相互に疎通しあう身体の重層性を問い直し続けることが不可欠とする菅原の著述は、身体の模倣がもたらす豊かさによって身体的コミュニケーションを育む方策を希求しようとする本研究の途に勇気を与えてくれる。

以上、哲学的な思索の中なかでは、身体が為す模倣を内包する現象を、同調、なぞり、共振といった用語で基本的な概念を表し、身体的コミュニケーションを豊かにする可能性を浮かび上がらせる重要な論点が提起されている。

Ⅲ. 社会生活の文脈から明らかにされる模倣と身体的コミュニケーションの意義

本章では、前章の哲学的な思索において語られた「身体」「模倣的な行為」「身体的コミュニケーション」が、どのような現実世界で発現しているのか、またどのような現実世界がそれらに価値を置いて注目しているのかを概観してみたい。

1. 人類学の領域からみた身体的コミュニケーションの豊かさ

近年最も感受性豊かに身体的コミュニケーションの秩序や構造の解明に価値を与えているのは、人類学の領域ではないだろうか。

菅原¹⁶⁾は、グヴィ (ボツワナ共和国、ブッシュマンの一方言集団) の会話分析における「同時発話」という相互行為研究を通してこれまでの非言語コミュニケーション研究の枠を越えて「身体のコミュニケーション」の核心に迫ろうとした。「人と人が身体としてくともにある>状態を単純な役割に換言することができない」と述べ、自らが以前に提唱した同時発話の類型化への問題点をも指摘し、概念として「言語の身体モデル」の発想を試みようとしている。そこでは、身ぶりのことばの照応を解き明かしており、「私の身ぶりは私のことばと同時性をもつものではなく、他者のことばと同時性をもつ」と述べている。こういった論述は、身体相互のやりとりが、相互行為に根源的な強調を生み出し、他者理解が自己理解を促すという可能性が示唆されるものである。同時に身体的コミュニケーションの果たす役割に迫るものであると感じられる。

一方、今村¹⁷⁾は、ブッシュマンの狩猟行動などの調査から同調行動の諸相を見つめ、彼らの文化においては気分転換や緊張からの逃避などの個人的な行為でさえも他者の身体を必要とし、たちまちに同調しあう様子に大きな関心を寄せている。他者を感じる力は、視覚や聴覚などのあらゆる感覚を総合させた「身体感覚」の自在な伸縮であると言及し、同調的行動が探極的に目指しているものは、人や自然を含めたまわりの環境との全体的なかかわりであることを見出している。

北村¹⁸⁾は、コミュニケーションという相において身体を考えるアプローチとして、北ケニアの牧畜民トゥルカナの「交渉」に注目し、身体的コミュニケーションは私たちが肯定的に生きること不可欠であることを「現在」という時性のリアルな経験の中なかで説いている。私たちは、身体に備わった他の身体に共振する能力や、共感に基づいて他者を理解する能力を想定することに慣れているが、むしろ逆方向の力「他者の身体の共振する能力や共感する能力を引き出す力」の分析を視野

に入れることが重要であるとし、身体的コミュニケーションを培う方略を現代社会に提起している。

人類学者の著述には、身体的コミュニケーションについて、文脈の個性性を越えた本質的かつ普遍的な経験が息づいていた。それは言葉を多く必要としない社会のコミュニケーションの様相を浮き彫りにすることで、私たちの生きる現代社会を照らし、相異なる人間社会のあり方を見つめることで、私たちが当然として了解してきた他者とのやりとりの方策への自省を促す深遠な思索に溢れている。

2. 療育という場における模倣の役割

1980年代頃から、感覚や運動の育ちに通ずる「からだ」を軸にした教育として「ムーブメント教育」が注目されるようになった。フロスティック (Frostig, M)¹⁹⁾が、発達心理学者ゲセル (Gesell, A) や ピアジェ (Piaget, J) などによって強調された考え方を、幼児や障害をもつ子どもの教育として体系づけたのである。わが国では、小林芳文²⁰⁾らが独自の内容を交えて紹介し、身体運動から全体発達をめざした教育として障害児の療育や発達援助の方法に一石を投じた。そこで本節では、療育すなわち障害をもつ人への発達援助という場、特に自閉症という障害への発達援助における模倣や身体的コミュニケーションの捉え方を整理してみたい。

自閉症障害児は「他の子どもに無関心で模倣行動がみられない」²¹⁾という特徴が主症状とされていることから、コミュニケーションとしての模倣行動発現の援助への関心は高い。その場合の模倣の意義は、概観すると二つの志向がみられる。

一つは、言語訓練法の一環として模倣を扱う場合であり、他者の模倣が社会的意識性の出現を促すことで、言語の量や質を向上させるという意義である。たとえば、自閉症児の反響言語的模倣行動が母親等の大人によって2語文、3語文へと拡張模倣され、これを師範刺激としてさらに子どもが模倣するという「拡張模倣 (imitation with expansion)」²²⁾「拡充模倣」²³⁾と呼ばれる技法を用いた訓練が、健常児だけでなく自閉症児においても有効であることが実験²⁴⁾や事例²⁵⁾によって明らか

にされている。この言語訓練の発想は、その後には、遊びのなかでモデルとなる他者による拡充模倣を師範刺激し、関心領域を拡大させ、他者の動機や意図を配慮した行動の獲得を促すという方法へと応用されていく²⁶⁾。現在では、この意義を明らかにし、方法論を模索する研究が国内外を問わず盛んに行われている²⁷⁾²⁸⁾²⁹⁾³⁰⁾。

もう一方は、身体意識の形成をもとに自己意識や他者意識の発達を促すプログラムの一環として、身体動作模倣の意義を前提としてそれを活用するものである。前述のムーブメント教育、ムーブメントセラピー、ダンスセラピーが挙げられる。特にダンスセラピー³¹⁾の事例では、身体と同調 (synchronous) や共振 (sharing) の経験を促すプログラムによって、身体の関係性から自己を意識させ他者への関心や信頼意識を目覚めさせ、他者の身体を探索し模倣する行為の発現を促すことで、自閉症的なジェスチャーを減少させ、コミュニケーション的なジェスチャーの幅を広げるという例を示している。そこでセラピストが語る言葉は、模倣の意義を見事に描き出している。「私は、身体的レベルにおいて彼女の世界を反映することからはじめる。私は、彼女と一緒に動くことで彼女の言語を“話す”ことを試みる。最初はより直接的な模倣、つまり私が遅れて応答するのだ。彼女が私の存在を認め、その信頼関係を築いたとき、私は偏った状態から離れ、より相互の対話が知らぬ間に始まっていることを発見した。私たちは同調したのだ。」³²⁾と語っている。“彼女の言語を話す”における“言語”とは身体の動きであり、“話す”とは模倣することである。このようなプログラムにおける模倣のもつ意味は、言語を獲得することではなく、一貫して身体を媒体にすることでコミュニケーション力を育むことにある。

以上の二つの志向は出発点や方法こそ異なっているものの、身体の模倣による他者とのかわりがコミュニケーション力を育むために有効であるという理解に共に辿り着いている。

身体を通して内的世界を“ほどよく”理解させ、共有させるという模倣の意義は、自閉症児の療育という世界にのみに留まらない。過敏でありすぎるために他者に無関心な態度を取らざるをえず、些細なことにこだわりを持ち、ぎこちない行動を

とるという自閉症児特有のありようを考えると、ひととしての典型性の高い世界から導きだされた視点として、現代社会の課題に直接迫る視点をわたしたちに与えてくれるのではないだろうか。

3. ヒューマンインターフェースという世界が扱う身体的コミュニケーション

科学技術は、デカルト (R. Descartes) の心身二元論以来、自己と対象を分離して客観視することで飛躍的な進展がもたらされてきた。しかし、こういった科学の成果は本質的に人間が関わっていない領域での成果であって、この方法論をそのまま人間あるいは社会に適用できると考えたところに大きな矛盾が生じたと言われる³³⁾。その自省のもと、近年、科学や工学という分野においても、ヒューマンインターフェースというキーワードを軸に身体的コミュニケーション (Embodied Communication) や感性といった「心が通う」ことへの関心が高まっている。ヒューマンインターフェースとは、機械と人間の接面を意味し、コンピュータサイエンスをはじめとして認知科学、人間工学、認知生理学、広くは心理学といった領域にまたがって、「人間が機械と交わりやすくするための技術」(ヒューマンインターフェース学会)を探求する領域である。その技術開発にとって、人と人の心が通う状態の解明が求められているのである。

渡辺³⁴⁾は、コミュニケーションにおける引き込みモデルとして話し手の音声に基づく聞き手の頷きや身振りなどの身体反応モデルと発話音声に基づく話し手の身体動作モデルを利用して、その身体的コミュニケーションの引き込み原理をロボットや電子メディアに導入することで、人とかわり、円滑なインタラクションがとれる身体的インタラクションシステムを開発しようとしている。話しやすい雰囲気をつくるために、相手のリズムに対して、頷きや身振りをういて身体を沿わせる営みを無意識におこなっていることの意義を明らかにしているのである。

三宅³⁵⁾らも、「人間と共生できる情報システム」としての共創インタフェースの設計原理説明において、物理的な同調とは異なる「人と人が間(ま)を合わせる」ことに着目し、人間同士の協調作業

に不可欠であると指摘している。

以上のように、身体的コミュニケーションの本質を明らかにし、コミュニケーションにおける身体的重要性を明らかにしようという目的を、情報工学という分野が求めていることに本論は注目したい。人間と共生できる情報システムを創ることは、すなわち人間と人間の営みを明らかにすることになるのであろう。そこでは、コミュニケーションを円滑にする要因は物理的な一致ではなく、身体的リズム同調による一体感や身体性の共有にあり、それこそが“心が通う”ことの本質的であるという見解に立っているのである。

以上、模倣には人と人の“ほどよい一致”をつくる機能があるという本研究の仮説が、極めて離れた領域からも裏付けられたと考えられる。また一方で、身体的なコミュニケーションを育むという課題を現代社会が普遍的に抱えていることが示されたと言えよう。

IV. 心理学領域における模倣の研究動向と知見

心理学の分野では、個人においてなぜ模倣が生起するのかの機序、人間の発達における模倣の果たす役割解明などへの関心を主としてその追求が活発に行われている。それらは心理学の分野に限定したとしても、発達心理学、社会心理学、臨床心理学、認知心理学、ひいては認知科学などいくつかの領域の多くの理論と関わりをもっており、すべてを検討するとなれば膨大な作業となる。本論の主たる目的は、身体的なコミュニケーション力としての模倣の果たす役割を検討することにある。そこで、対象とすべき範囲を、発達心理学および認知心理学の側面と、社会心理学の側面に絞って整理することにする。

1. ピアジェとワロンによる模倣

従来の発達心理学や認知心理学では、外的行為が発達に伴って内面化した状態を思考と呼び、思考力が形成されると身体や動きの役割が減少するという考えが一般的であった³⁶⁾。模倣を研究する意味は、言語獲得を発達の最高次の目標に据え、その機序に対して模倣がどのような役割を果たしているのかを考えるものであった。

この考え方は、模倣の発達を体系づけたピア

ジェの理論³⁷⁾に代表される。模倣を同化 (assimilation)、つまり外的対象を内にあるものに適応させるのではなく、内側にあるものを外的対象によって変更する面が強い行為 (シム) であるとした³⁸⁾。同化はピアジェ理論の根本的観念で、発達過程において外的要素を統合することであり、環境との相互作用を促進させるために必要不可欠であるが、同時に調節 (accommodation) を伴うとした。調節とは、同化の行為を修正することである。活動において同化が調節を上回るとき、その行為は遊びとなり、調節が同化を上回るとき模倣となり、両者が均衡しているときは知的行為となるとしている。

ピアジェ自らが示した知的発達としての4段階 (感覚運動的段階、前操作段階、具体的操作段階、形式的操作段階) における最初の感覚運動的段階 (0歳～2歳) において、その活動の根本が同化であるとし、模倣の発達を6段階に分類して論じている。最初の3段階は、反射によって後の模倣の準備をする段階、散発的模倣の段階、聞いたことのある声や見たことのある運動の組織的な模倣の段階である。次ぐ第4、5段階は、見たことはないがすでに行われたモデルの模倣の段階、新しいモデルを組織的に模倣する段階と進み、6段階目は表象的模倣がはじまる段階と説明した。

ピアジェは、目の前にあるモデルへの調節が行為による模倣として現れ、それが延滞模倣となり、最終的にイメージとして内面化されるという知能発達の構造を模倣の機序によって特質づけているとまとめられる。子どもは、そもそも閉じられた存在であり、次いで自己中心的となり、その後他者の存在を認めるという精神発達があり、その過程で模倣という行為が出現し、自我と他者の切り分けができ知能の発達が進み、思考が内面化していくと、その役割を終えていくというものである。

浜田³⁹⁾は、このようなピアジェの理論に対して、対物行動と対人行動の差異が看過されていると指摘し、特に、感覚運動期の模倣行動に関しては、対人行動との関係が無視されていることを述べている。ピアジェの理論が、子どもをまず個体と前提した発生的認識論と称される所以である。

これに対して、ワロン⁴⁰⁾は、関係論的視点を包

括した発達論を展開していると一般に評価されている。身体や運動を軸として、自我は他者との関係性のなかに深く入り込んで発達が遂げられるとし、身振りとしての模倣の重要性についても言及している。ワロンの定義した精神発達の4段階 (運動的衝動性の段階、情動的段階、感覚運動的活動の段階、投影的運動の段階) における投影的運動の段階 (3歳～) において重要な意味を持つとしているのである。「投影的運動の段階」とは、運動身振りが意識に心的表象を与える手段となる段階であり、そこでの模倣には3つのレベルがあると述べている。最初 (生後6ヶ月頃からとしている) は、自分がやったばかりの身振りを他者が再現するのを見て反復する。その後、自分の身振りをしていなくても、モデルの身振りを知覚しただけで模倣するようになる。もうひとつ高いレベルになると、モデルが目の前に知覚されなくても、時間を置いてまねできるようになる。子どもたちのごっこあそびの姿に見られるように、モデルは同化、吸収され、表象として模倣行為が生じる「延滞模倣」となるのである。

名須川⁴¹⁾⁴²⁾は、以上のようなワロンの身振りによる模倣の考え方を、保育の場に照らし、子どもたちの身体表現における現れを考察し、模倣が間身体による共同世界を構築する役割を果たし重要なコミュニケーション力になっていることを具体的に描き出している。幼児期を対象とした研究は稀少であり、その点において興味深い論考である。

2. 「ふり」と模倣

発達心理学者としての麻生⁴³⁾も、ピアジェの模倣に対する理論に対して、子どもと他者とのコミュニケーション活動を無視していると指摘している。そこから人間発達の過程を明らかにするのは年齢関数の問題でなく、様々な要素が循環していると考え、発達を心理、社会、文化の織りなす過程の問題として捉えようとすれば、もはや発達心理学という枠さらに心理学の領域を超え、学際的な取り組みが必要だと考えるに至った。それまでの発達研究が、理論研究としての解明に終わっている点を自省し、文化や社会を正面に据えて研究してきた人類学者や社会学者の視点や手法を取

り入れることを試みたのである。そこでは、身振り
と延滞模倣の縦断的発達について、一人の子ど
もに対する長期にわたる事例考察と、自閉症児療
育場面の長期観察による実証的な研究を行って
いる⁴⁴⁾。

本節では、麻生の一連の研究における「ふり
(pretending)」の理論を素描しながら模倣を捉え
てみたい。麻生は、乳幼児期初期の「ふり」を、
コミュニケーションとしてのふり、動作による表
象としてのふり、記号行為としてのふり、象徴的
行為としてのふり、の4つのタイプに分類してい
る。特に動作による表象としてのふりを検討する
過程で、「まね」と「ふり」の違いに言及してい
る。まねは、手本とそれを写す行為との一致つま
り同型性の認識にもとづくものであり、ふりは手
本とそれを写す行為との本来的なズレの認識が存
在するものであるとしたのである。そのうえで出
生後から1歳前後までの模倣の発達⁴⁵⁾を、共同化
された世界、自己、他者の三項が相互に依存した
創造的な認識活動への過程と位置づけ、内実を明
らかにしようとした。

生後半年頃に見られるのは“共鳴しあう身体”
であり、その後7ヶ月頃からは“行為の共同”の
始まりとして、「結果の模倣」つまり、他者の行為
そのものをまねするのではなく、他者の引き起
した結果を再生しようとする模倣が発現する。そ
の後には、自己と他者の行為の結果を比較してや
りとりをしてしぐさを模倣するようになる。生後
9ヶ月になると、本人が意識したしぐさや行為の
模倣がはじまり、他者との関係のなかでコミュニ
ケーション機能をもつことに気づき始めているこ
とが伺える段階としている。生後10ヶ月では、他
者の身体の引き写しといえるような無意識な模倣
が始まり、他者の態度や姿勢をはっきりと模倣し
始め、11ヶ月を過ぎると対象の同型化としての模倣
が活発になり、視覚的に確認できないしぐさの模
倣、つまり延滞模倣の端緒も見られるようになる
という知見を報告している。また、模倣したいと
いう気持ちは、自分を他者と同型的な存在として
組織できるようになることに伴って、他者の行為
に魅せられ、それと同じことをして自他の同型性
を貫徹させたいという気持ちを抱くからであると
考察している。

以上のような縦断的な考察は、身振りとしての
模倣行為を、コミュニケーションの萌芽として位
置づけ、その機序を明らかにしたものと言える。

模倣によって他者と同型になることは、他者と
世界を分かち合おうとすることであるという麻生
の見解は、模倣が身体的コミュニケーション力の
価値の中核をなす機能であることを的確に示して
いるとまとめられる。

3. ひとの初期のコミュニケーション研究にみ られる模倣：自己意識と他者認識の調整

ワロン、麻生に見られるような、コミュニケー
ションを基軸にしたひとの発達研究は、近年、質
的研究という研究方法の有効性への関心の高まり
に支えられ、多くの研究者によって様々な角度か
ら展開されている。

たとえば、やまだ²⁴⁶⁾⁴⁷⁾は、人は生まれながら共同
体であり、人と通じあうことを喜びとして発達を
遂げるとし、乳児期の同調的な行為としての身体
で「うたう」ことに関心を寄せ、モデル構成的現
場心理学と称した手法により、ひとりの子の観察
を通した深い洞察を展開している。そこにおい
ても、ピアジェとワロンの違いを解く思索を礎石と
して模倣に言及している。模倣や身振りの発生
の根っこには、響き合いたいという関係性があり、
それは生涯にわたって強められていくものとしな
がら、延滞模倣のはじまりは「待ち」という時間
における距離を作り出すことであり、発達によ
って身体がすぐに「うたう」のではなく、「間」がで
きることだとしている。身体の外側に顕著な効果
を生み出さないかわりに、「声」に惹きこまれ内部
に反響する感覚を味わい、再び共同の場へ「うた
」を生み出すことが、自己の確立に通ずるとしたの
である。共同性と自己回帰性という循環は、矛盾
しつつも拮抗し、その循環に支えられながら、自
己を確立していくと述べている。人間のコミュニ
ケーションの原初をとらえながらも、それが発達
の初期段階のみの役割に終わらず、むしろ社会で
生きる力が、コミュニケーションの原初に現れて
いることを浮かび上がらせている。

同様に、増山⁴⁸⁾も、人間の発達を他者と切り離
して捉えたり、あるいは母子関係の中だけに閉じ
こめるのではなく、「情動的な場」を形成する中で

自我が生成されるものとして、身体の相互の表現性に注目している。模倣すると模倣されるという行為のやりとりの上の“遊び”において、“他者にとっての私”と“私にとっての他者”という役割交替を心理的次元で可能にするものが形成されるとした。

岡本⁴⁹⁾は、模倣は身体性を通して自分を他者に重ね合わせることであり、自己形成過程の基軸となり社会的学習の基礎であると述べ、身体性とは個人に限定したものではなく、他者あつての自己を前提としており、他者の情動的共生のなかに主観的存在としての他者と自己を感じとることが、自己と他者の関係を理解する土台であるとし、模倣の意義を浮かび上がらせている。そこから、身体におけるフリが、ごっこ遊びの成立要件としての自己と他者の二重化、現実と虚構の二重化においても重要な役割を担っているという議論に繋げている。ふり、フリ、ふり遊びに関わる研究としては、高橋⁵⁰⁾が、メタ・コミュニケーション能力の発達を、ふり遊び (pretend play) における、子どもの発話や動作を通して検討しており、他者との模倣行動 (一致行動) をふりの前提として位置づけている。

近年の諸外国に目を向ければ、Jones, S. S.⁵¹⁾は、乳児における模倣の縦断的な発達調査から、模倣は、1つの根本的なメカニズムを備えた1つの行動の能力ではなく、異なるタイプの知識を組み合わせで発現する行為と報告している。双子を対象とした調査を行った McEwen, F.⁵²⁾は、親から模倣を促されて育った子どもは、言語だけでなく、ふりや社会的な洞察力のある行為の発達が促進される傾向にあることを示した。David R. Forman⁵³⁾は、観察調査により模倣に対する親の受容的な姿勢が、初期の道徳的発達において重要であることを述べ、模倣を善悪の観念の発達のメカニズムの中心的役割と位置づけている。身体的コミュニケーションが果たす役割をさらに拡げているようであり、模倣が乳幼児期だけでなく、その後の人格形成にも影響を与え続けることを示唆している点において実に興味深い。

以上のように、近年、乳幼児期の模倣やフリや身振りなどの象徴機能の形成に大きな関心が払われるのは、それが知的発達や言語獲得に直接的に

関わるからという理由を超えて、広く自己形成や人格の形成研究に結びつき、それらの形成の中核におかれる営みが、身体を通してのコミュニケーション力であるという捉え直しによるとまとめられる。一方で、多くの研究者が、象徴機能の構造解明に臨む背景には、発達研究にとって魅力的ながらも、未成熟な課題であり未だ解き明かされない問題が山積していることをも示している。

4. 社会心理学領域にみられる模倣：模倣と対人関係

これまでに、発達心理学の領域を中心に、ひとの発達という観点から模倣と身体的コミュニケーションの概念規定や相互のかかわりを概観した。近年、自己と他者という対人的な関係が模倣行為に重要な役割を果たしていること自体は受け入れられてきたが、コミュニケーション力としての意義や機能を積極的に捉えるためには、今後は、模倣と対人関係の機序は相互にどのように絡み合っ

て発達し変化していくのかという視点での研究が求められることも明らかになった。

この視点での研究遂行のための糸口を、社会心理学領域における「同化行動 (assimilative behavior)」に関する研究に見ることができる。同化行動とは、惹き込み (entrainment)、協働 (coordination)、無意図的模倣 (mimicry)、同期の概念 (synchrony) に共通した「行動や動作の無意図的な同調や一致、同期化、模倣」⁵⁴⁾を表す概念とされている。

内藤⁵⁵⁾は、社会心理学領域での模倣的研究として、社会学習理論、同調行動、社会的促進を取り上げて模倣行動と関連づけた論考を展開している。これらの研究に共通する特徴として、認知機序に重きをおいた意識的・意図的模倣に偏っていることを報告し、その原因が成人の模倣現象、とりわけ目的をもった対人行動や集団行動の解明をめざしているからだと分析している。さらに岸⁵⁶⁾も、発達心理学では乳児の表情の同化行動に関する研究が多いのに対して、社会心理学領域では、成人間での同化行動を研究対象としていることを指摘している。また同期行動にはふたつの機能があり、臨床や発達心理学領域が多く扱っているのは、感情伝播、感情的共感のための手段として

の他者理解に関するものであり、同化行動を共感の成立要因とする立場による。それに対して、社会心理学領域では、対人コミュニケーションにおける二者間の関係についての非言語メッセージ、具体的には「あなたに興味をもっている」といったメッセージの伝播として、共感の結果要因としてのコミュニケーション機能を観点にしている場合が多いと分析している。

内藤は、同化行動を早期の発達段階で見られる社会的意識性を欠く無意図的な行動であり生得性のものであるとして、特に発達初期の身体的接着（愛着）に強い関心を置いて無意図的模倣のもつ規制を解く研究を行っている。同化行動への身体的接着の側面は心理的接着へ、無意図的模倣の側面は意図的模倣へ分離し、目的的な同化行動へと変容していくことを、情緒障害児などの療育過程から明らかにしている。その後、成人においても同化行動が生起することを実験的方法によって実証している。成人の同化行動生起の条件は、無意識が支配的となる状況としての「恐怖（災害時のパニック追従行動）」「注意他在（エレベーターへの乗降場面で他に意識が向いていると、つられて降りようとしてしまう）」「モデルへの視野狭窄（ボクシング観戦中に、つい最良の選手と同じ動作をしてしまう）」を挙げている。以上のように、子どもの発達臨床研究と大人への実験研究を統合することで、同化行動から適応行動への発達変容と、成人における両規制の役割を図式モデルに取り込み、同化行動の理論を構築している。一連の内藤の研究は、言語を獲得してもなお続き、社会生活の重要な部分を担う同化行動を描き出し、その延長線上に広がる模倣現象の機能や可能性を探っている。幼児期における模倣の果たす役割を探りたいという筆者の模倣研究への動機を強化するものである。

一方、岸は同化行動を、生後間もない段階から生じ成人においても生起が認められる行動と、内藤の定義を一部修正したうえで、同化行動と感情的共感との関連について大人を対象にして実証的な研究を試みている。そこでは、同化行動と感情的共感とは、ともに対人場面のなかで生じるものであり、同化行動は身体・行動面で他者を自己に取り入れる現象であり、感情的共感感情面で他者

を自己に取り入れる現象だという表面的な点において異なっているにすぎず、両者の構造は同じものであると論述している。

内藤、岸の扱う同化行動は、いずれも無意図的な模倣であるが、その理論やメカニズムの解明では、同化行動が子ども、大人を問わず、円滑な対人関係の礎石となることを示唆している。

Cappella, J. N.⁵⁷⁾が、2人の被験者の笑顔の伝播を測定し、一方が模倣すると他方も模倣するという連鎖を明らかにし、「無意図的な同調や模倣という概念は関わりである」という考えを提示しており、Bavelas et al.⁵⁸⁾は、「同化行動は他者に関心を抱いていることを伝える行為」と述べていることにも裏付けられる。

ところで、社会心理学の領域からは、同化行動の対他機能、つまり模倣される側の心理についても言及する研究が見られるのは興味深い。Bate⁵⁹⁾は、子どもに模倣された大人が、その子どもに対して好感を抱くことを見だし、しかしながら子どもの模倣が意図的なものであると感じられるとその好意が形成されないことを明らかにしている。少なくとも大人の場合、意図的な模倣よりも、無意図的模倣が対人感情に強い影響を与えることを考察しているのである。

本研究が扱おうとしている幼児期にみられる模倣が、幼児にとって意図的なのか無意図的なものかを考えることは、ひいては意図的とするための要因が何か、つまり「何を」意図して模倣するかというメカニズムを解明することが鍵になると考えられ、また模倣される側の心理をとらえることによって、相互行為の本質的な姿を捉えることに繋がる可能性が示された。その際に、子どもの模倣と大人の模倣の違いを、単純な欠落や未成熟による差とみなすことがないように自戒しながら、幼児期以後の発達の变化過程についての理論や知見を背景に、身体的コミュニケーションの構造を多層にするための補完的な考察が求められることも確認された。

VI 総括

本稿では、哲学、人類学、心理学などの領域および社会生活のいくつかの文脈から、模倣に関する既存の理論や模倣発現の諸相を概観した。その

際、同調、同期、共振、なぞり、ふり(フリ)、身振り、同化行動などを、模倣という概念を広く包括する現象として取り上げ考察の対象とした。各領域での概観に際しては、他の領域との共通点や差異点、分岐点を考えながら、それらの現象の身体的コミュニケーションとしての位置づけについて論考を進めた。

哲学の領域では、身(み)、身体に関わる思索を中心として、同調、共振、なぞりの現象に拡大して模倣を論じ、身体性の本質は他者との関わりにこそ存在し、模倣という身体性がそれをつないでいることを浮かび上がらせた。

人類学の領域は、非言語コミュニケーションに関心を持ち、言葉以上に身体のみならず役割の解明に独特な切り込みを行っていた。それは、言葉を多く持たないアフリカ各地の民族の生活に入り込み、身体、同調、共振、伝染、交渉、身振りといった現象を説くことで、身体的コミュニケーションの本質的な姿を捉えようとするものであった。現代社会の状況の対極から問題を投げかけると同時に、身体的コミュニケーションの豊かさを描き出す思索が見られた。

障害児の療育という分野では、身体意識の開発という側面から模倣発現を促す方法の開発が求められていることが見とられた。模倣が他者認識と自己意識をつなぐ機能を有し、社会性の発達を促進させるために有効な行為であることが典型的に示された。

全く異なると思われる分野、人間が機械と交わりやすくするための技術を開発するヒューマンインターフェースという分野においても専らに関心が、心が通う状態を様々な身体感覚から解明しようとするにであった。模倣には、他者との“ほどよい一致”をつくりだす機能があるという本研究全体の仮説が、照準を合わせたかのように浮き彫りにされた。

心理学領域では、発達心理学と社会心理学の分野を中心として、膨大な模倣研究から明らかにされた考察と知見の一端がまとめられた。そこでの模倣は、大別すると二つの方向性を持って扱われていた。ひとつは「模倣は発達初期の段階における知的発達の機序を示す行為」とする方向性からの発達のアプローチ的研究である。身振りやふり

といわれる行為の発生や象徴機能の変容を追究し、延滞模倣の発現が知的能力の指標となるとというメカニズムに模倣の価値を認めている。

もう一方は「模倣は、発達初期に留まらず言語を獲得しても続き、ひとのコミュニケーションの重要な部分を担う行為」という成人の行動を対象とした方向性の研究である。対人的行動や集団行動の文脈における同化行動、無意図的模倣、意図的模倣などの行為の発生や変容を追究し、個人の発達の側面を超えた社会的影響過程の一形態としての模倣を描き出し、その延長線上に広がる模倣的行為のもつ機能の可能性を探るものであった。言語獲得過程における機序以外の機能においての模倣への関心はひろがっているが、一方で未知の部分が多いことも明らかにされた。

以上のように、身体的コミュニケーションへと収束される身体のみならず相互行為としての模倣への関心は、様々な領域においても留まるところがない。しかしながら、現状においては、模倣とコミュニケーション両者の関係そのものを研究対象としてとりあげ、発達に伴ってどのような変化を見せるのかを扱った研究は少なく、なかでも幼児期を対象とした研究はみあたらない。

また、幼児期における身体的なコミュニケーションの希薄化が、後の児童期や青年期、成人後に何をひきおこすのかという観点からの研究も、今のところほとんど行われていない。現代の生活環境や文化の変化に起因することは自明であるが、そのように結論づけるだけでは何も得られないであろう。そのために、幼児期における身体的なコミュニケーションの構造、たとえば、誰と誰のかかわりが、どのようなコミュニケーションの側面に影響し、どのようなプロセスやメカニズムがあり、そこから何をj得ているのか、どのような営みがその後を持ち越されていくのかなどを、具体的に丁寧に明らかにしていくことが求められる。その点において、幼児期の身体的コミュニケーションとしての模倣のもたらす豊かさを解くことは、ひとつの手がかりとなると考えられる。

本稿において、模倣が知的発達過程を象徴する機能だけでなく、身体的コミュニケーションとしての意義や機能を持っていることが示された。幼児期の身体的表現としての模倣の意味や機能を明

らかにし、身体的コミュニケーションとしての模倣の果たす役割を実証的に検討し、身体的コミュニケーションがより豊かに機能するような環境や支援を研究することを目的とする本研究の意義が確認されたと考えられる。

実証的な検討と合わせて、保育や教育の現場で発現する模倣を捉える視点や導かれた理論を整理し、保育・教育現場で発現する模倣を捉える価値を明らかにすることが、本論考における残された課題でもある。

引用・参考文献

- 鈴木裕子「幼児の身体活動評価尺度の開発：子どもアクティビティ尺度」体育学研究、50-5, pp. 557-568, 2005
- 佐々木健一「模倣」『美学辞典』東京大学出版、pp. 45-53, 1995
- 市川浩『精神としての身体』勁草書房、1975
- 市川浩『＜身＞の構造：身体論を超えて』青土社、1985
- 鷺田清一『悲鳴をあげる身体』PHP 研究所、1998
- 鷺田清一『表象としての身体』大修館書店、2005
- 尼ヶ崎彬『ことばと身体』勁草書房、1990
- 尼ヶ崎彬「なぞりとなぞらえ」山田奨治『模倣と創造のダイナミズム』勉誠出版、2003
- 竹内敏晴・佐伯胖「対談『からだ：認識の原点』をめぐって」佐々木正人『からだ：認識の原点』東京大学出版、1987
- 竹内敏晴『子どものからだのことば』晶文社、1983
- 竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』筑摩書房、1988
- M. メルロ＝ポンティ「言語の現象学について」高橋允昭訳『現象学の課題』せりか書房、pp. 105-136, 1983
- 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版、1987
- 菅原和孝「コミュニケーションとしての身体」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館、1996
- Ekman, P., & Friesen, W. V.: The repertorie of nonverbal behavior : Categories, origins, usages, and coding. : Semiotica, 1, pp49-98. 1969
- 菅原和孝「ひとつの声で語ることー身体とことばの「同時性」をめぐって」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館、1996
- 今村薫「同調行動の諸相ーブッシュマンの日常生活から」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館、1996
- 北村光二「身体的コミュニケーションにおける「共同の現在」の経験-トルカナの「交渉」的コミュニケーション」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館、1996
- M・フロスティック『ムーブメント教育・療法』小林芳文訳、日本文化科学社、2007
- 小林芳文他編著『ムーブメント教育実践プログラム』コレール社、1988
- 山崎晃資「自閉症」『発達理解と発達援助』別冊発達 22, pp. 138-150、ミネルヴァ書房、1997
- 内藤哲雄『無意図の模倣の発達社会心理学：同化行動の理論と社会心理学』ナカニシヤ出版、p. 87, 2001
- Brown. R. & Bellugi, U.: Three processes in the child' s acquisition of syntax: Harvard Education Review, 34, pp. 133-151, 1964
- 小林重雄・杉田忠男・平野忠夫・坂田よう子「自閉症児の語らい拡大と文構成の訓練における新しい試み」『障害児の診断と指導』2-6, pp. 14-20, 1983
- 内藤哲雄 前掲書 21, pp89-119
- 小林重雄・杉田忠男・平野忠夫・坂田よう子 前掲書 23, pp. 14-20
- Toth, Karen. Dawson, Geraldine. Meltzoff, Andrew, Greenson. & Jessica, Fein.: Early Social, Imitation, Play, and Language Abilities of Young Non-Autistic Siblings of Children with Autism Deborah: Journal of Autism and Developmental Disorders vol. 37, Number 1, pp. 145-157 (13) 2007
- Julie Beadle-Brown. & Andrew Whiten. :

- Elicited imitation in children and adults with autism: is there a deficit? : Autism Deborah Journal of Autism and Developmental Disorders Vol. 29, Number 2, pp. 147-163 (17), 2004 ,
- 29) Jessica A., Meyer, R., & Peter Hobson, :Orientation in relation to self and other: The case of autism Interaction Studies Vol.5, Number2, pp. 221-244 (24), 2004 ,
- 30) Williams J. H. G., Whiten A., & Singh T., : A Systematic Review of Action Imitation in Autistic Spectrum Disorder : Autism Deborah Journal of Autism and Developmental Disorders Vol. 34, Number 3, pp. 285-299 (15) 2004 ,
- 31) Janet.Boettiger: The Study of an Autistic Child Maureen Costonis : Maureen Needham『Therapy in Motion』2, pp. 5-34, Univ of Illinois Pr, 1977
- 32) Janet, Boettiger. 前掲書 30, p26
- 33) 渡辺富夫「身体的コミュニケーションにおける引き込みと身体性ー心が通う身体的コミュニケーションシステム E-COSMIC の開発を通してー」『ベビーサイエンス』Vol. 2, pp. 4-12, 2003
- 34) 渡辺富夫「身ぶりは口ほどにものを言う」長尾 真編『ヒューマン・インフォマティクス』工作舎, pp. 85-104, 2005-6.
- 35) 三宅美博「「間 (ま)」を合わせる共創型インタフェースの設計原理に関する研究」科学研究費補助金特定領域研究成果報告、1996
- 36) 佐伯胖「補稿 なぜ、今「わざ」か」生田久美子『「わざ」から知る 150、東京大学出版会、1987
- 37) J. Piaget. 大伴茂訳『模倣の心理学』, 黎明書房、1968
- 38) J. Piaget. 中垣啓訳『ピアジェに学ぶ認知発達科学』北大路書房、2007
- 39) 浜田寿美男『ピアジェとワロン 一個的発想と類的発想』ミネルヴァ書房、1994
- 40) 浜田寿美男訳編『ワロン／身体・自我・社会』ミネルヴァ書房、1983
- 41) 名須川知子『保育内容「表現」論』ミネルヴァ書房、pp. 111-125, 2006
- 42) 名須川知子「幼児前期の身体から派生する表現活動に関する研究」兵庫教育大学研究紀要 17-1, pp. 115-122, 1997
- 43) 麻生武『ファンタジーと現実』金子書房、1996
- 44) 麻生武「身振り」と延滞模倣の縦断的発達研究」科学研究費補助金重点領域研究成果報告、1996
- 45) 麻生武『身ぶりからことばへ』新曜社、1992
- 46) やまだようこ「共鳴してうたうこと・自身の声がうまれること」菅原和孝・野村雅一 (編)『コミュニケーションとしての身体』pp. 40-70, 大修館書店、1996
- 47) やまだようこ『ことばの前のことば』新曜社、1987
- 48) 増山真緒子『表情する世界＝共同主観性の心理学』新曜社、1991
- 49) 岡本夏木『幼児期：子どもは世界をどうつかむか』岩波書店、2005
- 50) 高橋たまき「ふり遊びにおけるメタ・コミュニケーション能力の発達」科学研究費補助金成果報告、1997-1998
- 51) Jones, Susan S.: Imitation in Infancy: The Development of Mimicry: Psychological Science, Vol. 18, Number7, pp. 593-599 (7), 2007
- 52) McEwen, Fiona., & Happé, Francesca., Bolton, Patrick., Rijdsdijk, Fruhling., Ronald, Angelica., Dworkzynski Katharina., Plomin, Robert., : Origins of Individual Differences in Imitation-Links With Language, Pretend Play, and Socially Insightful Behavior in Two-Year-Old Twins : Child Development, Vol. 78, Number2, pp. 474-492 (19) '2007
- 53) David R. Forman, Nazan Aksan, & Grazyna Kochanska, : Toddlers' Responsive Imitation Predicts Preschool-Age Conscience : Psychological Science Vol.15, Number10, pp. 699-704 (6), 2004
- 54) 岸太一「感情的共感と同化行動に関する研究」早稲田大学大学院人間科学研究科博士論文 (未刊行)、p. 3, 2003
- 55) 内藤哲雄、前掲書 21

- 56) 岸太一、前掲書 53
- 57) Cappella, J. N., : The facial feedback hypothesis in human interaction-Review and speculation. Special Issue-Emotion communication, culture, and power. :Journal of Language and Social Psychology, 12. pp. 13-29, 1993
- 58) Bavelas, J. B., Black, A., Lemery, C. R, & Mullet, J.-" I show you how you feel"- Motor mimicry as a communicative act. :Journal of Personality and social Psychology. 50, pp. 322-329, 1986
- 59) Bates,L.E.:Effect of a child' s imitation versus nonimitation on adult' s verbal and nonverbal positivity :Jounal of Personality and social Psychology. 31, pp. 840-851, 1975

A Study on Imitation as Physical Communication

Suzuki, Yuko*

This paper first takes a look at the various ways in which imitation develops from the standpoint of philosophy, anthropology, psychology, as well as from the context of social life, and through existing theories and researches on imitation. Second it organizes theories on the topic of physical communication as well as discusses the possibility that imitation nurtures physical communication skills. As a result, it became clear that imitation not only has the function of indicating the mechanism of intellectual development, but also has the function of facilitating physical communication. The significance of revealing the meaning and function of imitation as body expression in childhood, empirically considering the role of imitation as physical communication, and researching environment and support that would help enrich physical communication has been confirmed.

キーワード：模倣 (*imitation*)，身体的コミュニケーション (*physical communication*)，身体的表現 (*body expression*)

*Nagoya Ryujo (St. Mary's) College